
ねこじたトリニティ

猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ねこじたトリー＝ティ

【Zコード】

Z0777BA

【作者名】

猫

【あらすじ】

気がつくと子猫と一緒に見知らぬ場所にいた。そこは『スキルカード』で成長する不思議な世界。冒険者ギルドに入り、カードをそろえて強くなつていく主人公のお話です。

第01話 子猫

目が覚めると、僕はのどかな野原に寝ていた。かたわらに子猫も寝ていた。僕が動いたのに起こされたのか、やがてその子猫も起きた。なぜかやたら擦り寄つてくる。そつとなでてみる。

綿毛のついた雑草があるので、それで子猫をじゅらしてみる。夢中になつて飛びかかる子猫に思わず顔がほころぶ。

子猫と遊びながらあたりを見回す。見覚えのない場所だ。野原の周りには木々が生い茂り、特に人工物も見当たらない。どこか自然公園だらうか。

持ち物を確認する。いつもの普段着のほか、何も持つていないようだ。

やがて林の向こうに人影が見えた。とりあえずそちらを目指して歩き出してみる。僕が歩き出すと子猫もついてきた。懐かれてしまったようだ。まわりに親猫の姿は見られない。どうしようか迷ったが、とりあえず保護することにした。僕は子猫をやさしく抱きかかえた。

林を抜けると石畳の道が連なつていた。巨石があちこちに転がり、苔むすその様は、まるでどこか観光地にでも来たかのように錯覚する。林を抜ければここがどこか分かるかと思っていたが、ますます分からなくなってしまった。

やがてその人影のもとにたどり着く。それは見慣れぬ服を着た女の子だつた。休憩していたのか大きな岩を背に座つている。麦藁帽子をかぶり、何か農具らしきものを抱えていた。まとめた黒髪、あまり化粧もしていなさそうな日に焼けていない白い顔、そのときは純朴な娘さんという印象だつた。

「ここにちは。」と声をかける。

「すいません、この子の親猫知りませんか。それから僕、迷っちゃつたみたいで、ここどこか教えていただけませんか。」

しかし言葉が通じなかつた。女の子も身振り手振りでなにやら訴えかけてくるが分からない。やがて子猫が「ミヤー」とない。すると女の子は目を丸くして僕の手の中の子猫を覗き込む。やたら抱きたさそうにしてるので、そつと手渡す。

女の子は子猫をみつめ、「ニヤーニヤー」と言ふ、応じるようこそ猫も「ニヤーニヤー」言つてゐる。まるで会話でもしているかのようだ。

この後どうするか困つてゐると、女の子に腕をつかまれた。にっこりと笑いながら軽く腕を引かれて、歩くよつに促された。どこか人のいるところに連れて行つてくれるのだろうか。あるいは親猫の居場所なり飼い主なりを知つてゐるのか。子猫は女の子が抱いたまま、いつの間にか幸せそうに眠つてゐる。まあいいかと、少しばかり不安になりながらも僕は歩き出した。

石道が続く。自然にできたのかあるいは誰かが手を入れたのか、巨大なアーチや石塔が並ぶ。景観に驚嘆を覚えつつ、きょろきょろとあたりを見回しながらも女の子に並び歩いていく。やがて女の子は、石を積み上げた古風なたたずまいの家の前で歩みを止めた。

扉を開け、家に入り、椅子をつながされたので座る。子猫を渡されたので預かると、女の子は部屋を出て行つた。茶でも出してくれるのかと思い、おとなしく待つてゐることにした。

しばらくすると、子猫用のベッドらしき小さなかごと、何やら薄いカードらしきものを持ってきた。かごには食事と水を入れた器も入つていた。促されるまま子猫をベッドにそつと移す。子猫は幸せそうに眠つてゐる。

それを見守つた後、彼女はカードを胸にあてて入れるよつな仕草を僕に見せる。僕にもやつてみると渡されたのでやつてみると、不思議なことにカードは体の中に吸い込まれていつた。突然のことに驚き、説明を求めようとしたが言葉が通じない。彼女は笑つたままだ。いつの間にか用意してあつたお茶を勧められる。彼女が落ち着

いていることと、体に異常もなさそうなことから、お茶にも害はないそと判断してお茶を飲むことにした。

やけに美味しいお茶だ。うつすらと甘く、清々しい香りとまろやかな苦味がのどを潤す。一つだけ難点をあげるとすれば、少しづるいことくらいだが、おそらくこれが適温なのだから、何より猫舌の俺にはありがたい。

お茶を飲み、少し落ち着いてきた頭でこれまでのことを考える。そういうえばカードに何やら書かれていた。見たこともない字だった。あれは何だったんだろ?としばらく思案していると、彼女が話しかけてきた。

すると、その言葉が、分かるようになっていた。

「どう? そろそろ喋れるようになつたと思うけど。」

事態がよく飲み込めない。ひとまず浮かんだ疑問を投げかける。

「えーと、なぜ言葉が突然分かるようになつたの? それより、あの子猫は君のかい?」

それを聞き、僕が喋れるようになつたのを確かめると、彼女は話を続けた。

「んー、どこから説明すればいいのかしら。とりあえず、あの子は迷子で、しばらくうちにで育てることにしたわ。」

子猫の引き取り先がみつかって安心した。おそらくこの人なら大丈夫だろ? なぜかそう思えた。

「それから言葉が通じるようになつた理由だけ? 『スキルカード』って分かる?」

彼女が解説してくれたところによると、僕が突然言葉を理解できるようになったのは、スキルカードというもののおかげだそうだ。そんな突拍子もないことがあるわけがないとはじめは思っていたのだが、実際にこうして言葉が分かるようになつた以上、信じるしかない。

カードにはいろいろ種類があるそうだ。剣術や魔法が使えるよう

になるものから、基礎的な体力が強化されたり、何かものを作るのが得意になつたりするらしい。

先ほど入れたカードは『マターテービ語』のカードで、1年ほどこの地で生活したくらいの話力が身につくこと。語彙もそれほど増えるわけではないが、普段生活するには十分なレベルであり、読み書きもできるようになるといつ。

「自己紹介がまだだつたね、私の名前はマールマール。マリーって呼んでね。」

「えーと、僕は…………春人、春人夜色です。ハルトとでも呼んでください。」

その後もいろいろと話をきいた。ここがどこかとか、地球を知っているかとか、今はいつかとか。それで聞いたことを総合してまとめるところになる。

どうやら僕は異世界に紛れ込んだらしい。

第02話 カードスロット

僕が異世界に紛れ込んだのではないかと最初に推測したのはマリーさんだ。この世界にはそうやって訪れるものがわりと多いらしく、いろいろな世界から迷い込む人がいるという。そうやって来たものは『漂流者』と呼ばれているそうだ。

時として悪意あるものが漂流者としてやつて来ることもあるという。それは人でないときもあり、モンスターとして居つたりするらしい。しかしいずれにせよ冒険者ギルドにより討伐クエストが発令され、遅かれ早かれそういうたものたちは排除されるそうだ。

異世界に来てしまったこと、戻れない可能性が高いことに僕は戸惑つた。元の世界でやり残したこと、やりたかったことがたくさんあるように思えた。それよりもこれから先、この世界でどうやって生きていけばいいのかということに、主眼を移して考えねばならないのだろうけど、気持ちの整理がつかない。

僕が不安定な心情を汲み取ってくれたのか、マリーさんが話を振つてきてくれた。

「ハルトさんもしばらくこの家で暮らしてくれていいわ。もちろん何か働いてもらうけどね。」

どうやつて働くのかなど、僕のこの後の生活についてマリーさんと話をした結果、僕は冒険者になることになった。冒険者になるのにもいろいろ費用がかかるみたいだが、彼女が立て替えてくれるという。そのかわり、僕の着ている服を預けてほしいとのこと。裁縫を嗜むそうで、この世界では珍しいこの服に興味があるようだ。しきりに観察される。どちらにしろその格好では目立つからと、彼女手作りの服を渡されたので着替えた。

「すごいわこの縫い目！ この生地も…………お金払えなさそうだったら、代わりにこれを頂戴ね。」

マリーさんは上機嫌である。それをしまじこむ動作の端々から喜

びのオーラがにじみ出でているようだ。

「さて一緒にギルドに行つてもいいけど、子猫ちゃんが心配だしそうと留守番しててもらえるかしら。係の人を呼んでくるわね。10分ほどで戻ると思うから、よろしく頼んだわよ。」

そう言つて鼻歌交じりのマリーさんは、冒険者ギルドに向けて出て行つた。さて僕はどうするか。仕方ない、子猫でも見守つて時間をつぶそう。いまだに少し不安な僕を尻目に、子猫は安心しきつた表情で寝ていて。…………子猫の名前でも考えるか。

しばらくしてマリーさんは猫耳をつけた人と戻つてきた。タミーさんと言ひひこ。よく見れば猫耳だけでなく全体的に猫っぽい。仮にマリーさんを黒猫とすれば、タミーさんは虎猫だ。金色に輝く毛並に触れたい誘惑に駆られる。それを抑えつつ、一通り挨拶をすませ、子猫も紹介してから、僕はタミーさんと冒険者ギルドに向かつた。…………タミーさんは子猫にして執心だったが、寝ていて起きないのであきらめたようだつた。

「あの、タミーさんは、……猫、なのですか？」

「そうだにや。由緒正しきネコヒト族の末裔だにや。それよりも子猫かわいかつたにやー。もう名前は決めたのかにや？」

感情表現の豊かな猫耳を見つめつつ、猫耳をさわりたいとか、モフモフさせてほしいとか、いろいろ欲求がつのつたが思いとどまる。その後も街の中の目印やら何やらを解説してもらしながら歩く。ほとんど一本道だったので迷うことはないながら歩く。やがてギルドに着いた。小さな看板のついた趣のある古い建物だ。中に入るとあちこちの壁が暖かそうな絨毯で飾られていた。

「じゃあ準備をするから、そこで座つて待つてほしいにや。」「示された椅子に座り、彼女を待つていると、やがて何かを小脇にかかえて戻ってきた。

「ではまずこの一枚のカードを入れるにや。」

一枚のカードには、『感知：自己感知 レベル01／20』と『補助：カード操作 特殊』と書かれていた。言われるままそれを自分に差し込む。

「自己感知のカードで自分のことが詳しく分かるようになるのにや。ついでにカード操作のカードで自分にインストールされているカードを操作できるようになるにや。」

スキルカードを体の中に入れ、5分ほどすると定着してその効果が使えるようになるそうだ。それまでの間、いろいろ話を聞いた。まずカードの種類。基礎、脚力、武術、魔法、補助、感知、製作の七種類が基本らしい。そして人間にはそれぞれに対応した『スロット』があり、種類の違うカードは入れられないそうだ。スロットの数は人によってまちまちで、魔法のスロットが多い人、製作が多い人などいろいろあるそうだ。そのスロット数の多寡によって、職業の適性を量るらしい。

「スロットにはほかに『フリー』のスロットもあるにや。」

フリーのスロットには、ほとんどのカードを入れられるが、その代わり、『カードが成長しない』のだという。

「カードが成長？ どういうことですか？」

「んー。カードが成長すると、効果が大きくなるにや。上位の魔法が使えるようになつたり、体力強化のカードならさらに上昇量が増したりするにや。大雑把に言うと、より強く、より早く、より精確になつていくにや。」

「なるほど。」

「さつき言った基本の7種類がその成長枠にや。成長スロットとも言つにや。それから今言ったフリー枠、そして最後に保存枠つてのがあるにや。これはカードを保存しておくためだけのもので、カードを入れても効果は出ないのにや。」

やがて唐突に、目の前にウインドウのようなものが開いた。そこにはこう書かれている。

スロット

成長スロット

基礎	空き	：1	/	1
脚力	空き	：1	/	1
武術	空き	：1	/	1
魔法	空き	：1	/	1
補助	空き	：1	/	1
感知	空き	：1	/	1
製作	空き	：1	/	1

フリースロット 空き：0 / 3

『補助：マターテービ語 特殊』

『補助：カード操作 特殊』

『感知：自己感知 レベル 01 / 20』

保存スロット 空き：3 / 3

「それがハルトさんのカードスロットの現状にや。『カード操作』か『自己感知』で見えるようになるのにや。さて、スロットの空きがどうなつているのか教えてほしいにや。」

「成長枠が1ずつで、フリーだけ0ですね。今三枚ささつてるから3枠つてことでいいのかな。それから保存枠が3枠です。」

「にや！ オール1に3プラス3とにや？！」

「はい。」

「これは多分すごいことなのだろう。武術も使え、魔法も使え、さらに製作までこなす。これはひょっとしたら伝説の勇者とかに匹敵するかもしれない。」

「どうでしょう？ この場合何の素質があることになりますか。」

「控えめに聞いてみる。」

「素質ゼロにや……。最低レベルにや……。」ここまで適性のない人

ははじめて見たにや！で……、でも、あきらめたらそこで終わりにや。地道に努力すれば人並みくらいにはなれる？……と思うにや。

「

散々な言われようである。

「そんなにひどいんですか……。」と落胆していると、タミーさんは説明を続けた。

「んー。まず成長枠は、たいていの人はどれかが2枠あるのにや。その2枠がどれかで適性を見るにや。たまにどれかが3枠あつたりするけど、そういう人はエリートまつしぐらにや。フリー枠も保存枠も3枠は最低にや。」

ここまで言つと、すこしづかり何かを考えるように間を置き、少しづかり口調を変え、僕を量りにかけるかのように聞いてきた。

「どうして、ハルトさんは、冒険者に、なりたいのにや？」

なぜ僕が冒険者を目指すのか。

正対するタミーさんの態度を見ていると、この質問には真面目に答えるべきなのだろうと直感した。しかし、この単純な質問には、少し複雑な答えが必要だ。僕は少し時間をもらい、マリーさんとの会話を思い出して考えをまとめる。

「三分考えていただろうか、一人を包んでいた緊張がこころなしかほぐれてきたころ、僕は話し始めた。

「理由は二つあります。まず、スキルカードを獲得できるチャンスが増えるということです。冒険者であれば、クエストの報酬の一環として、スキルカードをいただけると聞きました。冒険者以外と比べて、圧倒的にカードを得る機会が増えるというのは、カードを持つといない僕にとって、とても魅力的です。」

うなずき静かに聴いているタミーさん。クエスト報酬以外にもカードを手に入れる手段はあるというが、それは非常に限られているという話だ。購入することも可能らしいが、一般に冒険者が報酬として得る場合と比べて、かなり割高なやり方になるという。

「次の理由は、生活のためですね。マリーさんに伺ったのですが、冒険者になれば手っ取り早くお金を稼げるとのこと。特別な技能もスキルカードも何もない僕が、真っ当にお金を稼ぐ手段はこれがベストだという話でした。」

うなずくタミーさん。マリーさんの話だと、雑用などを含めて冒険者ギルドに持ち込まれるかなり仕事は多いそうだ。真面目にやればまず食いつぱぐれないと聞いた。

「最後の理由ですが、僕自身が、冒険者になることに少しあこがれてこることです。僕がいた世界では冒険者という職業があり

ませんでした。それはおとぎ話の中にだけある存在でした。幼いころ読んだそれは、危険ではありましたが非常に魅惑的でした。将来は冒険者になるといつ夢を描いたこともありますでしたが、あきらめざるを得ませんでした。』

「つなずきを止めるタリーやん。やりたいと言つだけでは説得力は低いから。」

「つまるところ、効率的なカード収集、金銭的問題の解決、それから僕自身の意思、この三つが理由です。」

タリーやんはうにうにやうに言つながら何か考えている。

「正直に言つて、冒険者はあまりお勧めできないのいや。冒険者はカードの枚数が強さに直結するにや。時として命に関わる職業を選ぶよりも、比較的安全な他の道を選んでもいいのにや。とは言え、スキルカードもぜんぜん持つてないみたいだし……、うにやいや……。」

そして少々もつたいたいをつけるように言つた。

「しょうがないにや、条件をつけるけどそれでもいいにや？」

「はい、ありがとうございます。それで、どんな条件なんですか。」
「まず、通常の冒険者はランクをEからスタートするんだけど、Fランクからはじめてもらつにや。Fランクつてのは、病み上がりとか、義務違反ペナルティとかの特別な理由がある冒険者があるもので、いろいろ制限があるにや。とりあえず村の外に一人で出るのは禁止にや。受けられるクエストもこちらで制限をせてもうつにや。討伐系の依頼なんてもつてのほかにや。しばらぐの間、雑用をいろいろこなしつつ、カードを集めて強くなつてもうつにや。」
「わかりました。しばらくの間つていつのばれくらいでしようか。」

「いやー。そうだにやー。半年くらいつて考えとくにや。様子を見てテストをして、合格したらEランクに昇格にや。」

思つたよりも長そつだ。半年が指し示す期間が分からぬ。『マ

ターテービ語』のカード能力ではここまでが限界のようだ。地球の半年と違つていそつだが、あいまいな期間設定をこれ以上明確にするより、ぽかしておいたほうがいいだろ。後でマリーさんに聞いておこう。

「分かりました。勝手に村から出ないことに、受けられるクエストに制限があるつてことですね。」

「だいたいそつこや。冒険者カードに書いておくから、いつそり村の外に出ようとしたつて無駄なことにや。」

それから冒険者の義務やらギルドの仕組みやらを教えてもらい、ひとまず冒険者登録は終わつた。冒険者カードは後から届けてくれるといつ。

さて質問はないかと言つので、気になつていたことを聞いてみることにした。

「枠を増やす方法つてないんですか？」

「いくつかあるけどどれもすご。手間がかかるにや。手つ取り早いのは薬で増やす方法にや。レアな秘薬を飲むと保存枠が一つ増えるにや。それと同じくらいレアなお薬を飲むと、保存枠一つをフリー枠一つに変更できるにや。そしてもう一度別のお薬を飲んでようやく成長枠に変更できるにや。」

「成長枠一つはお薬三回分つてことですか。ちなみにそれらのお薬つてどれくらいレアなんですか？」

「レアとは言つても街で売つてるにや。ただし、普通の人が真面目に働いてお金を貯めて数年で買えるくらいのお値段にや。自力で手に入れるのは難しいからあきらめたほうがいいにや。」

なるほど、大きな目標ができた。枠を増やすことだ。とは言えお金がそうとかかるらしい。ひとまずお金を稼げ。ちなみにこの方法で増やしたり変更したりできるスロット数は、薬によつて増やせる限度数が違うといつ。例えばある秘薬なら全枠合計20枠になるまで保存枠を増やせる。しかしそれ以上増やすなら、別のもつと

入手難度の高い薬を使う必要がある、ところよつになつてこぬやつだ。

「いや待つにや、確か合計16枠まで保存スロットを増やせる方法があつたと思つにや。それほど難易度も高くなかつたと思つから、そのうち挑戦するといにや。ハルトしゃんは、ええと、オール1で7、足す6で合計13枠だから……、なんと3回も使えるにやー。後で調べておくにや。めつたに使わなかつから忘れてたにや。」

ちよつとばかり馬鹿にされたような氣もしたけど、悪気はないものと信じたい。苦笑しつつ僕はお願ひした。

「ありがとうござります。おねがいします。」

質問タイムも終わり、早速何かクエストを受けてみたいと希望してみた。

「初級者向けのクエストで手ごろなのが見つかうにや。村から出ればいくつかあるんだけどにや。だからまた明日にでも来るといにや。依頼がなかつたら何かギルドの掃除でも用意してもらつにや。」

掃除か。想像していたものとまつたく違つが、しばらくな下積みだ。それでカードがもらえるなら喜んでやるにや。

「それよりとりあえず宿題を出しておくにや。」

言い渡されたそれは、『カード操作』の能力を使わずに、カードを自由に操作できるようにするにすることだった。これができるようになればスロットが一つ空くので、必然的にその分強くなれるという。今はまだそもそもスキルカード 자체がほとんどないのだが、早めに空けられるようにしておいて損はないだらう。

「説明が難しいけど、『カード操作』の能力で、『カード操作』のカードの能力を使わない設定にしてから、カードを操作するにや。」

「うん……、うん……？」

「……まあいろいろ試してみるとにや。念のため警告しておくけど、しばらくの間『カード操作』のカードは外してしまわないよ

うに気がつけるにゃ。」

これはなんとなく分かる。カード操作ができなくなつて詰む、といつゝことだらう。ちよつとばかりタミーさんの説明が頼りない氣もしてきたので、後でマリーさんに聞いてみよつ。

しかしカード枠が空けばその分強くなれるというなら、マターラビ語も自力で習得した方がよさそうだ。それを聞いてみると「もつともだにゃ」と返された。課題が増えた。

登録も終わり、質問も終わり、宿題を出され、用事はなくなつた。では戻りますと言つと、迷子になつたら送つてあげるから戻つておいでにやと軽口を返された。迷いませんよと答え、言葉どおり迷うことなく無事マリーさん宅に戻ると、子猫がマリーさんと遊んでいた。こちりに気がつき、マリーさんが「おかえり」と声をかけてくれた。

それに「ただいま戻りました」と僕が返すと、子猫が喋つた。子猫が、喋つた。

「パパー！ おかえりにゃー！」

第04話 カードランク

マターテービ語とは、つまり猫の言葉らしい。最初にマリーさんと出合ったとき、子猫に「ニャー ニャー」と言っていたのは、子猫が話せるかどうか確認するためだつたそつだ。すでに子猫は「ニ」はんが食べたい」とか「ねむい」とか簡単な意思伝達ができるという。しかし、猫語を覚えないとスロットが空かないのか。試しにカードを外してみたら「ニャー」としか聞こえないし、難易度が高そうだぞ……。

「一つ一つ簡単な単語から覚えていけばいいわよ。それよりもカード操作の練習がまず先ね。」

そう言えばパパとか呼ばれたことの方が気になる。追求しようかどうか迷つてゐると子猫がまた喋つた。

「ママー！ 『はーん食べるニャー！』

「はーん」とマリーさんは子猫を運ぶ。僕がパパでマリーさんがママか。二つの間にそんなん関係になつたのだろう。これからマリーさんをなんて呼べばいいのか悩むな。

嬉しいような困つたような複雑な表情をしていたのだろう。マリーさんが睨んでいる。

「アイちゃんのために、私がママ、あなたがパパということになつたけど、変な気は起こさないよ。」

でつかい釘を刺される。しかも二つの間にか子猫の名前も決まつてるみたいだし……。

「とりあえず、ハルトさんの部屋はそこね。好きに使つていいくけど、汚さないよ。」

「はい。ところで子猫の名前、決まつたんですか？」

「うん、アイちゃんだよ。」

「いやー……呼んだー？」

「違うの、『めんね、アイちゃん。』」

「違つの、『めんね、アイちゃん。』」

せつかくいろいろ名前を考えていたのだが、もう認知されているみたいだしあきらめよう。それにしてもまだ何もしていないので、既に尻に敷かれているような気がするのは何故だろう。やはりカード枠が少ないからか。いやそれは関係ない。ちょっとコンプレックスを持ちすぎだ。

割り当ててもらった部屋には、ベッドと机と椅子があつた。壁にはいろいろ収納できそうな棚もある。あちこち部屋を確認していると、聞きなれた声の人が玄関から飛び込んできた。

「こんばんはにゃー。遊びに来たにゃー。」

「あらタミーさん、仕事はもう終わり?」

「うん、今日は早仕舞いしてきたにゃ。子猫に会いにきたにゃー。違うにゃ。もうじやないにゃ、冒険者カードができたので届けに来たにゃー。」

「やう、じゃあせつかくだし今日は泊まつていいくといわ。」

「せうせしもひつにゃー。」

「どうぞにゃ」と渡された冒険者カードを受け取る。そこには注記としてこう書かれていた。

注記：村外に出るには保護者いすれかの同伴が必要

保護者 マールマール、ターマターマ

ターマターマとはタミーさんの名前らしい。初めて知った。それはともかく保護者つて表記はどうにかならないのか。

タミーさんは子猫と遊んでいる。それを見ながら僕はカード操作の練習に励む。先ほどマリーさんに教えてもらつた練習方法だ。まずは『カード操作』の能力でカードを移動し、感覚をつかむ。慣れてきたら無効にして自力で動かしてみる。動いたらそのまま反復練習。動かなかつたらまた有効にして動かす。というやり方だ。注意点として、できたと思っても油断しないようこと言ひ渡された。何か別のことに意識がそれると途端にできなくなるところ。

「ハルトちゃんは何やってるのにゃ?」

「カード操作の練習中です。難しいですね。」

「がんばってるにゃー。えらいにゃー。そういうえば依頼なかつたから、明日はギルドの雑用をしてもらおうと思つてるにゃ。」

「僕が戻つてからわりとすぐ『ギルド』を出たのだから、依頼など来るはずもなかろうとも思つたが黙つておく。」

「わかりました。ちなみに報酬はどのくらい戴けますか?」

「ハルトしゃんはお金とスキルカードだつたらどちらが欲しいにゃ?」

「最初のうちはスキルカード優先でほしいですね。ただお金も少しはあつた方がいいのかな。」

「じゃあ、半日くらい働いてもらひにゃ。今回は大サービスでカード1枚に10カリカリつけるにゃ。」

カリカリというのはお金の単位らしい。それにどれくらいの価値があるのかはまだ分からない。しかし出された条件で引き受けた。新米のこの僕が半日働いたくらいでスキルカードをもらえるというのは、おそらく言葉どおり大サービスなのだろう。そうなると10カリカリはお小遣い程度と思つたほうがよさそうだ。

その後みんなで夕食を食べ、順番にお風呂に入った。寝るまでの時間どうするか迷つたが、もらつたノートでマターラーニング語の学習をすることにした。まずは挨拶などの簡単な単語を書き出していく。その横に日本語で対応する語を書く。そして最後に発音の仕方を書く。問題はその発音だ。

「スキルカードの『聞き取り』の機能だけをオフにして、言葉を発してみてね。その言葉を聞こえたまま書けばいいわ。逆に『発音』だけをオフにして、自分で話しているのを聞いてみれば、発音矯正もできるはずよ。」

マリーさんはやつ言つていたが、スキルカードの一部機能の停止が難しいことと、『聞き取り』機能を解除すると「にゃーにゃー」としか聞き取れないことからこの作業は難航した。違いが分からぬ。どうにも一人では無理だ。また後でマリーさんにコツを聞いて

みよつ。

猫語の勉強はあきらめ、カード操作の練習をすることにした。いろいろ試しているうち、眠くなってきたので寝ることにする。慣れないとこりに来たせいか、一人で寝るのが少しばかりぞびしい。しかしいろいろあつたせいで疲れていたのか、わりとすぐに寝てしまつたようだ。

翌朝。猫さんたちはすゞに早起きだ。

「まだ寝てるのかにゃーーー起きるにゃーーー。」

「にゃーーー起きるにゃーーー。」

感覚で言つとこつもよつ一時間くらい早い気がする。大きな猫さんと小さな猫さんに起こされ、顔を洗い、いつの間にか用意された朝食をみんなで囲む。昨晚の夕食もそうだったが、どの料理も適度にねる。猫舌の僕が嬉しがるくらいなので、世間の常識からすればもう少し温かいほうがいいのだろう。

今日の僕の予定は、午前中ギルドで雑用をこなし、お昼に帰つて休憩後、家の雑用をすることになっている。子猫のアイちゃんの予定は、午前中ギルドでタミーさんに遊んでもらい、お昼に僕と帰ってきて、午後からマリーさんに遊んでもらうのだそうだ。

「肉体労働だけがんばるにゃ。鍛えておいて損はないにゃ。冒険者は体が資本にゃ。」

そんなことを言われ、荷物の大移動をさせられた。書類が多いのかやけに重い。休憩を挟みながら午前中いっぱい働いた。まだ荷物が半分以上残つている。

「いやー助かったにゃ。明日もまたやつてもひつにゃ。」

「パパおつかれにゃー。」

「さて、報酬を渡す前に、今日はカードランクの説明をしておく。や。」

聞いた話をまとめると、スキルカードには『ランク』があるところ

う。低いほうから並べるとカツパー、シルバー、ゴールドとなつて
いる。さらにそのそれぞれで、コモンとレアに分かれる。つまりカ
ツパー、コモンから、ゴールドレアまで6段階あるということだ。当然
上のランクのカードの方が強いカード、便利なカードになるという。
「報酬で獲得できるカードはすべてのランクの中からランダムにや。
だから運がよければすごいカードを手に入れられるかもしれないに
や。」

ちなみにカツパーアの出る確率はだいたい7分の1だそうだ。
一つ上のランクのカードが出る確率は7分の1ずつ減少し、シルバ
ー、コモンが出る確率はおよそ50枚に1枚。ゴールドコモンなら2
500枚に1枚だという。

それを聞き、手持ちのカードを確認する。『カード操作』と『自
己感知』がカツパーアノーマル、そして『マターテービ語』が、ゴール
ドコモンのランクだつた。ひょっとしてすごい価値のあるカードか
もしれない。2500枚に1枚のカードだ。早いところ言葉を覚え
て返したほうが良さそうだ。そのあたりのことをタミーさんに聞い
てみることにした。

「言語のカードは需要があるからお高いにや。商人をはじめ必要と
している人は多数にや。『マターテービ語』のカードの相場は知ら
ないけど数万カリカリの価値があると思つにや。」

そんな高価なものだつたのか。マリーさんに感謝せねばなるまい。
「ただ、一度カードをインストールしたら、再度カード化するには
コストがかかるにや。一般的な方法だとカード化用のアイテムを使
うにや。でもそのアイテムのお値段はお高いのにや。ゴールドコモ
ン用再カード化アイテムだと、数千カリカリくらいしたと思つにや。
」

これははじめて聞く情報だ。そう言えば昨夜、カード操作の練習
でカードを外に出してみようとしたとき、できなかつたのを思い出
した。寝る前で疲れていたのでそのまま忘れてしまつていたが、カ
ードを出せないのはそういう仕組みだつたからか。

カードのランク説明も一段落ついた。「それじゃあこれにゅ」と何も書かれていなし、両面が黒いカードを渡された。
「入れてみるまで何のカードが入っているかわからぬにゅ。幸運をいのるにゅ。」

僕は早速、それを、そつと胸に差し込んだ。

「さて、報酬のカードが何だったのか聞くのは、基本マナー違反なのににゃ。それに限らず、自分の持つていいカードは教えちゃだめにや。カード構成を知られると言つことは、弱点をさらすのと同じにや。もし誰かに聞かれても、これからは言つちやだめににゃ。もちろん聞くのもやめておいた方がいいににゃ。」

ふむふむ、確かにそうだ。しかし、そう言つてつまんね。猫耳がそわそわと動いている。今差し込んだカードが何なのか興味があるようだ。ランクだけでも教えておくか。

「残念、ただのカツパー「モモン」のカードでした。」

「そうなのかににゃ。ちなみになんだつたのににゃ？」

言つていることがきれいにちがはり矛盾している。ここは試されていふと見るべきだらうか。単純にタミーさんがそういう性格なのか。教えてしまつたてもいい氣もするが悩む。

「先ほど教えちゃだめと習いましたので、秘密です。」

「……う、うににゃ。それでいいににゃ。よく覚えてたににゃ……えらいににゃ……。」

耳がしょぼんとうなだれる。ものすくへしょんぼりとした雰囲気がただよう。少しかわいそうになつて思わずしぶやく。

「知りたいですか？」

「教えてくれるのかににゃ？」

耳が元気に反応し、こちらを向いた。期待につむぐる眼差しがまぶしい。ふと、昨日スロット数のことで、少し口けにされたようなことを思い出した。仕返しとは言わないが、ちょっとこじわるをしてやう。

「じゃあちよつとだけその猫耳をそむかせてもいいませんか。」

耳がびくんと振るえ、後ろを向く。

「ににゃ……、それは……うににゃ……。」

「タミーさんみたいな立派な猫耳って初めて見るんですよ。ほら、僕ってこんな耳でしょ？だからすごく興味があるんですよ。」

多分今僕はすごくずるそうな表情をしてそうだ。タミーさんはそんな僕を上目遣いに見て、仕方なさそうに言った。

「うーん、ちょっとだけにゃよ。」

ひょっとしたらいろいろ誤解を生んでしまったかも知れない。だけどいい。ゆっくりと手を伸ばし、タミーさんの猫耳に触れる。緊張しているのかピクピクと震えている。そのままそっと撫でる。

「うにゃ……。楽しいかにゃ？」

「はい、とっても。」

「そうかにゃ……。じゃあ今日はいいまでにゃ！」

そう言つてタミーさんは逃げるようにな後に飛び跳ねる。しまつた、もう少しあわつていていたかったのに。

「さあ約束のものを出してもうにゃ！ 嫌とは言わせないにゃ。まだ耳が倒れている。よっぽど恥ずかしかったのだろうか。それを隠すよつこちよつと強気を装つているよつだ。

「はい、ちょっと待つてくださいね。」

そう言つて僕は先ほど引いたカードだけを目の前に表示させた。マリーさんから教わったやり方だ。ウインドウを表示する機能を一部分解除して、特定のカードだけを表示させる方法である。『カード補助』の能力を使っても少し難しい。上級者向けの操作だ。

「にゃー！ もうそんなやり方覚えたのかにゃ！ すういにゃ。」と感心したあと、「どれどれ、よく見せてみるにゃ。」と隣に擦り寄つてくる。

タミーさんが顔を寄せて覗き込む。やににほにほに書かれていた。

『カツパー・モモン

脚力：運搬力上昇 レベル 01 / 20
注記 フリースロット不可』

「おー、これは当たりだにやーー！」

「そうなんですか？」

「たくさん運んでもらえるにや。」

当たりというのはタミーさんにとっての話なのだろうか。本当は魔法のカードが欲しかったのだが、これはこれで便利そうだ。早速それを脚力スロットにセットしてみた。心なしか身が軽くなつたような気がする。いや、5分後に効果が出るんだつたか。

フリースロット不可というのが少し気になる。そういえばこのカードはフリースロットではなく保存スロットに入つていた。おそらく脚力スロット専用なのだろう。念のためタミーさんに聞いてみた。「フリースロット不可のカードはフリースロットに入れられないにや。脚力のカードは不可になつてているものが多いにや。ほかにも時々フリースロットに入れられないカードがあるみたいにや。そういう、魔法カードもほとんど不可だにや。」

なるほど、脚力と魔法は特別なのか。これは覚えておこへ。

「にや。それから判別済みのカードはフリースロットに優先で入るけど、未判別のカードは保存スロットに入るのにや。」

そういうたわけで、保存スロットがいっぱいになつていると、未判別のカードは入れられないらしい。そう言えば最初にマリーさんがカードを入れる仕草を見せてくれたとき、カードがマリーさんに入らなかつたのは、おそらくこの応用だつたのだろう。

「ちなみにこれつてどのくらい効果があるんですか？」

「にやー。10パーセントくらいにや。カードによって効果量が違つたと思うので詳しくは分からぬにや。感知系のカードレベルが高くなると、詳しい効果がわかるようになつたりするから、それまでお預けにや。」

僕の持つている『自己感知』のカードでも、レベルが上がれば詳しい数値がわかるという。しかしほどが上がらない。成長スロットにカードをさしているだけで、勝手にレベルが上がるが、スキルを使つたりモンスターを倒したりすればその分早く成長するという

話だった。まだ一日目、もう少し気長に待つてみるか。

「脚力系は便利にや。レベルを上げておいて損はないにや。特に運搬力上昇は重装備ができるから戦士系に人気によ。それ以外でも運用に需要は高いにや。」

なるほど、少なくとも汎用性の高いカードだ。じぱりくはこのカードで十分だ。

さて報酬ももらえたし、そろそろ帰ることにする。わらつたお金をポケットにしまし、アイちゃんを探す。

「そう言えばアイちゃんはどうですか？」

「遊びつかれてベッドで寝てるにや。」

僕はタミーさん挨拶をして、かごのベッド」とアイちゃんと家に戻る。タミーさんはアイちゃんと離れたくなによつた。ギルド前まで見送りに来てくれた。もちろんアイちゃんのためにだが。おそらくタミーさんは、アイちゃん田舎で夕方ごろまた来るだる。何か理由をつけて。そんな気がする。

戻るとマコーさんが食事の用意を済ませてくれた。

「おかえりなれこ。」

「ただいま戻りました。」

アイちゃんはまだ寝ている。テーブルの上にカットベッドを乗せ、手を洗い、僕も席に着く。

「それで午後はどうしましょうか。」

「うーん、掃除とか洗濯とかでもしてもいいつかと思つてたんだけど、食料の備蓄が足りないのよね。だから予定変更。午後はアイちゃんを預けて、一人で狩りに行きまよ。」

そうだろうな。今までマリーさん一人分で済んでいたところに、僕とアイちゃん、タミーさんまで加わったのだ。あつといつ間に食料が減るだろ。

「でも、タミーさんから聞いているかと思いますが、僕は役に立ち

ませんよ。」

「荷物持ちにはなるでしょ？ 大丈夫よ、危険なところには行かないから。」

ちょうど運搬力上昇のカードも引けたところだ。荷物持ちなら任せください。そう言いたかつたが黙つてていることにする。カードの能力があるとは言え、どう考えても僕の素の能力はこれらの世界の人と比べて低そうだ。見栄を張るのはやめておこう。

そういうわけで、午後は急遽狩りに行くことになつたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0777ba/>

ねこじたトリニティ

2012年1月5日21時47分発行